

伝統的工芸品産業事業者の 魅力を伝える 知的資産経営報告書

～伝統的工芸品産業事業者の魅力とそれを支える知的資産を明らかにする～

有限会社浅田漆器工芸

2011年 9月発行

INDEX

| | | |
|-------------------------|-------|---|
| 1. 当社の代表製品 | | 1 |
| 2. 当社の概要 | | 2 |
| 3. 伝統的工芸品産業の歴史や当社のこだわり | | 3 |
| 4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産 | | 4 |
| 5. これからの挑戦 | | 5 |
| 6. 4代目からのメッセージ | | 5 |
| 7. 作成支援士業コメント | | 6 |
| 8. 知的資産経営報告書とは | | 7 |

1. 当社の代表製品



左上:Shikki de Pasta 左下:櫛あつたか椀あかね 真ん中:お茶ミル 右上:櫛茶入 柿 右下:Cup 200 溜
お茶ミルは、デザインの斬新性が認められて意匠登録されました(意匠登録番号:1217822号)。

2. 当社の概要

■ 経営理念

国産の木地にこだわって木のぬくもりを大切にし、お客様だけでなく職人の皆様に対しても誠実に真心をもって、「人と人の絆」を大切にします。

■ 当社の特長

● 製販一括体制

当社では、商品企画から販売までをワンストップで対応しております。直販店を山中温泉街のはずれに設けており、観光客との交流も盛んです。直販店を持つことでお客様との交流が深まり、ニーズを察知しやすい体制を整えております。製販一括体制の別の特徴は、短納期に対応できることです。当社は加飾を施した商品を多く扱っておりません。そのため、塗の工程がものづくりとしての工程のほとんどであり、それを内製化しているため、お客様の要望には柔軟に対応できます。また、この体制により価格をできる限り抑えております。

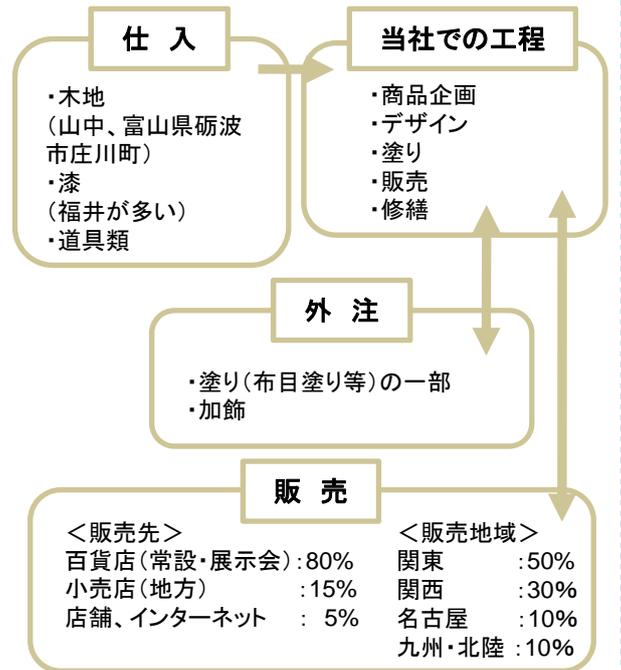
● 木地師のDNAを受け継ぐ商人

当社では、木地師のDNAを受け継いだ者がプロデューサーとして活躍しております。山中漆器の業界では、「商人(あきんど)」が商社機能を担い、商品開発も手掛けております。塗職人が「塗師屋商人」として商社機能も兼任することはありましたが、木地師が商人を兼任することはほとんど聞きません。当社に木地師はおりませんが、木地師の技術を幼少から見聞かし、木地師の心を持った商人が商品開発を担っております。

● 木、木地にこだわる

当社は、木地にこだわっております。当社は、国産の木の持つぬくもりを大切にし、より身近な器として日常的に用いられるために、木地師の技を活かして新しい形を取り入れるようにしております。当社の製品は加飾を施したものが少なく、木目や木の味わいを感じられるように拭漆仕上げによるものが多いです。

■ 当社のビジネスモデル



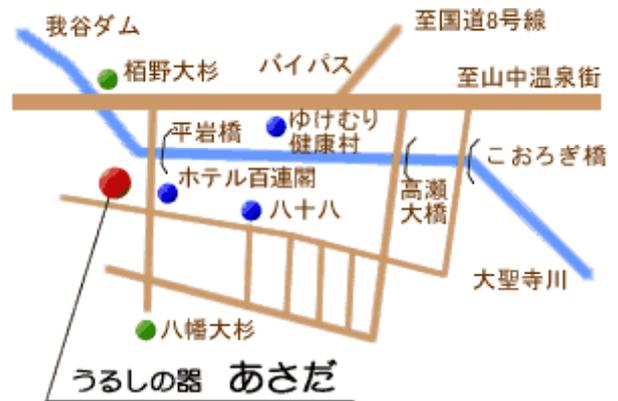
■ 企業概要

【代表者】 浅田 孝
 【住所】 石川県加賀市山中温泉菅谷町ハ-215
 【業種】 木製漆器製造販売業
 【従業員数】 6名
 【資本金】 5,000千円
 【URL】 <http://www.uruwashikki.com>

■ 沿革

明治45年 山中温泉大内村の木地職人に師事した嶋田京作が創業。
 昭和52年 有限会社浅田漆器工芸に法人成。3代目(現社長)が代表取締役に就任。
 平成10年 うるしの器あさだとして工房を新築し、1階を小売店とする。
 平成22年 4代目明彦入社。

■ アクセス



■ 連絡先

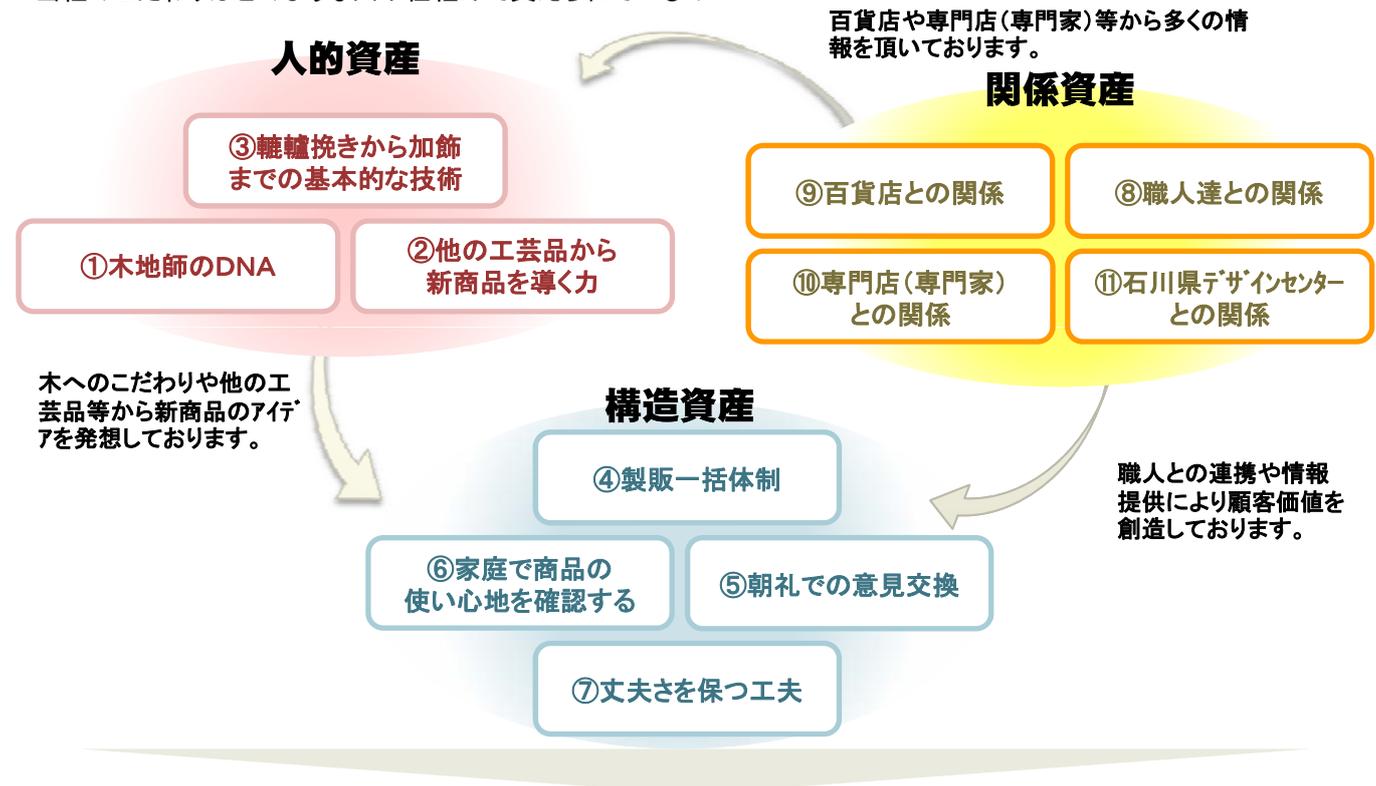
TEL : 0761-78-4200
 FAX : 0761-78-0470
 E-Mail : asada@kaga-tv.com
 担当者 : 浅田 明彦

4. 当社が提供する価値とそれを支える知的資産

■ 当社のこだわりはなぜ形成されたの？（過去から現在の価値創造のストーリー）

| 木地師としてのDNAを形成 | 商人への挑戦 | 日常生活にある漆器を目指して |
|--|--|---|
| <p>創業者の京作は、轆轤が盛んな山中温泉大内村で轆轤技術を学び、独立しております。初代は、10人の弟子を育てるほどの職人でした。その子孝夫も父親の跡を継ぎ、兄弟3人で木地師となっております。</p> <p>当社は木地師として創業し、2代目までは純粋な木地師として営業しておりました。3代目で現代取締役役の孝は、商人に転向しましたが、2代目の木地師としての仕事を幼少期から間近にしていました。そのため、木地師の仕事、技術、木や木地の特徴を熟知する商人になりました。しかし、職人としての経験不足を実感していたため、4代目に技術を学ばせるために、大学校や研修所に通わせました。</p> | <p>3代目は、木地師としてではなく、商人としての道を歩むこととしました。理由は、山中漆器の良さを広く伝えたいと考えたことです。</p> <p>独立後、3代目は、商人としての実力を積むために、多くの百貨店で陶器やガラス等の工芸品をできる限り多く研究することとしました。木地の可能性を広げるために、他の工芸品のかたちを研究したのです。他の工芸品を参考にすることは、4代目にも受け継がれております。</p> <p>独立した当初、2代目は山中漆器木地生産協同組合の理事長についておりました。商人転向への多少の反発は覚悟しておりましたが、それまで職人との関係性を重視していたため、生産管理者としての商人の仕事は円滑に進められました。</p> | <p>3代目が目指したのは、「漆器」というより、日常生活の中で身近に使える「木の器」です。日常生活で用いるためには、丈夫である必要があります。また、使い心地も重要です。</p> <p>器を丈夫にするために、お椀の縁に強度を高めるための漆を塗ること等の工夫をしております。使い心地を判断するために、実際に家庭で試用しております。また、女性の意見を反映させるために、朝礼で女性従業員から意見を聞いて議論しております。</p> <p>日常生活で用いていただくために、できる限り価格を抑えるようにしております。製販一括体制としていることや拭漆の技法により使用する漆を減らしていること等により、価格を抑えております。</p> |

■ 当社のこだわりはどのような人や仕組みで支えられているの？



【提供する顧客価値】 木のぬくもりがわかり、日常生活の中で身近に使える漆器を提供します。

当社が提供する顧客価値は、3代目と4代目が受け継いだ木地師のDNAによる木へのこだわり(①)と他の工芸品等から新商品のアイデアを導く力(②)を土台とし、会社内でアイデアをブラッシュアップしたり(⑤)、家庭で試用する(⑥)ことにより創造されております。新商品のアイデアやデザインについては、製販一括体制(④)による顧客情報や長年懇意にしている百貨店(⑨)、マーケティングやデザインに長けた専門店(専門家)(⑩)、石川県デザインセンター(⑪)等から協力をいただいております。商品を提供する際には、製販一括体制(④)、丈夫さを保つための工夫(⑦)、木地師や塗師等の職人との連携(⑧)も重要です。

※文章中の番号は、上図の知的資産を意味します。

5. これからの挑戦

- 当社は常に進化します。(未来の価値創造のストーリー)

3代目から4代目へ

現在当社は、3代目から4代目への転換期に差し掛かろうとしております。

4代目は高校を卒業後、漆器造りの基礎技術を学ぶために京都伝統工芸大学校(TASK)と石川県立山中漆器産業技術センターの石川県挽物轆轤技術研修所に通いました。これにより、技術がわかる商人への第一歩を踏み出しております。また、お客様との交流によりニーズを把握する取り組みも実施しております。例えば、百貨店での実演販売です。轆轤挽きから加飾まで一通りの技術を学んだ4代目だからこそ可能な取り組みです。

4代目は、木を大切にし、木にこだわりをもつ木地師としてのDNAや、他の工芸品から新商品のアイデアを発想することも3代目から受け継いでおります。4代目は、リチャード・ジラの陶磁器等を参考に、ハスタ皿やカレー皿を山中漆器で開発しております。この商品においてもやはり、丈夫さや使い心地を追及しております。

3代目が形成したノウハウ等は4代目にも受け継がれております。

身近で使える器のネクストステップ ～日常に非日常を持ち込む器～

4代目は、3代目が培った顧客価値をさらに発展させるために、日常に非日常を持ち込む器の開発に取り組んでおります。日常に持ち込む非日常とは、日常的に用いる器を美術品として鑑賞可能なまでデザイン性を高めることです。

現在検討中のデザインは、山中木地師の技術が活かされる薄挽きをもちいた、“浮遊感”があるものです。この“浮遊感”があるデザインは、最近のトレンドのひとつであるシンプルライフを象徴したインテリアに適合するものと考えられます。近年の不安定な社会の中で、地域色が高い伝統工芸品の手仕事を見直す動きがあります。一方、これまでとは異なった「新たな定番」を求めるニーズもあります。4代目はこのニーズに応えるのが、日常に非日常を持ち込む器と考えております。この新事業では、市場調査及び販路開拓、デザイン開発において専門家の協力を得ております。

4代目は、初代京作から受け継がれている木地師としてのDNAを持って3代目が培ったノウハウを十分に活用し、新天地を切り開こうとしております。

6. ～4代目からのメッセージ～



- 昭和63年 山中町で生まれる。
- 平成18年 京都伝統工芸大学校(TASK)にて、2年間にわたり塗と蒔絵の技術を学ぶ。
- 平成20年 地元に戻り、石川県立山中漆器産業技術センターの石川県挽物轆轤技術研修所で挽物の基礎を習う。
- 平成22年 4代目として、当社に入社。

浅田漆器工芸は代々、木地づくりの仕事を行ってきました。私、浅田明彦は高校卒業後京都伝統工芸大学校に入学し、漆芸コースで漆器づくりの基礎を学んできました。京都の職人さんに直接ご指導していただき、モノづくりの難しさ、大切さを学びました。

それからは地元山中に戻り先祖が仕事をしていた挽物木地を始め、塗り、蒔絵などの漆器づくりを2年間勉強してきました。

これからは京都と山中で勉強してきたことを商品に活かし、『漆器離れ』と言われている若い世代に向けた日常づかいの漆器を作っていく、山中漆器のロクロの技術や塗りの技術を広めていく活動を行っていきたいと思っています。

7. 作成支援士業コメント

中小企業診断士 佐々木 経司

同社は、木地が全国的に有名な山中漆器の産地にあって木地師として起業し、発展した企業です。3代目からは商人として事業を展開しておりますが、木を大切にし、木を出発点とする木地師のDNAは今なお健在です。

同社の今後の発展のカギとなるのが、商品開発に関する構造資産です。具体的には朝礼での意見交換、発展的にいうならば、商品開発会議です。4代目は今後新たな分野に挑戦する予定ですが、その分野においても社内で商品開発の土台となるコンセプトを構想することに期待します。新事業の初期は外部専門家の知見を十分に活用することが望ましいと考えられますが、そこで学んだものを同社流に昇華させて商品開発のノウハウ(構造資産)とすることを期待します。

朝礼での意見交換を構造資産として高めるためには、意見交換の内容を記録に留めたり、様々なツールを用いて従業員の考えを引き出してまとめる取り組みが必要です。4代目におかれましては、マーケティングによる外部からの情報と連携職人も含めた内部のノウハウをまとめるスキルを身に付けることに期待いたします。

行政書士 勝尾 太一

木地師として創業した浅田漆器工芸は、当代(3代目)が事業を引き継いでより商人(あきんど)として新たな道を歩んできました。これは、初代、2代目の仕事を間近に見て、触れていた3代目だからこそ、木のことや木地の特性、木地師の技までも熟知した商人として新たな事業を営むことが可能であったと考えます。

浅田漆器工芸にとって、4代目となる後継者を得た今後の展開は、極めて重要です。その前提として、これまで、3代目が蓄積してきた目に見えない人的な資産、例えば、経営理念である国産の木地にこだわって木のぬくもりを大切することを、いかに実現してきたのか、いかなる方法で「人と人との絆」を大切にしてきたのかを一つ一つ丁寧に明らかにし、それを受け継ぐ努力が必要となります。人的資産のみならず、構造資産、関係資産についても同様であり、知的資産の棚卸しを進める最大の好機にあります。

また、浅田漆器工芸をより多くの方に、知っていただくため必要となるパンフレットや説明のために作成する一つ一つが浅田漆器工芸の創作物であることを明確にするための、著作権管理や、今後、増加すると考えられる外部の専門家との提携、特に商品のデザインについて提携する際に知的財産権の取扱いを予め契約書等で明らかにするために管理部門の強化等が重要となります。今後、益々の発展に期待いたします。

弁理士 横井 敏弘

有限会社浅田漆器工芸(以下、当社)は、地域で受け継がれてきた山中漆器の技術に誇りを持ち、その可能性を信じて、山中漆器を製造・販売してきました。特に、山中漆器の木地に関する技術は、世界最高水準であると確信しており、これを世に広めることが、当社の使命であると考えております。

当社は、この絶対的な強みを背景にして、ニーズや利用シーンに適した漆器を独自に開発し提案していきます。商人として収集した情報を分析し、それを最高の技術で形にしていきます。その際に、意匠権なども裏付けとして活用されることをお奨めします。また、山中漆器の産地や当社で承継されるノウハウについては、その価値をしっかりと認識し、言語化する等して管理されることを期待します。

8. 知的資産経営報告書とは

【意義】

「知的資産」とは、従来のバランスシートに記載されている資産以外の無形の資産であり、企業における競争力の源泉である人材、技術、技能、知的財産(特許・ブランドなど)、組織力、経営理念、顧客とネットワークなど、財務諸表には表れてこない、目に見えにくい経営資源、すなわち非財務情報を、債権者、株主、顧客、従業員といったステークホルダー(利害関係者)に対し、「知的資産」を活用した企業価値向上に向けた活動(価値創造戦略)として目に見える形で分かりやすく伝え、企業の将来に関する認識の共有化を図ることを目的に作成する書類です。経済産業省から平成17年10月に「知的資産経営の開示ガイドライン」が公表されており、本報告書は原則としてこれに準拠して作成いたしております。

知的資産のイメージ



【注意事項】

本知的資産経営報告書に掲載しております将来の経営戦略及び事業計画並びに附随する事業見込みなどは、すべて現在入手可能な情報をもとに、弊社の判断にて記載しております。そのため、将来に亘る弊社を取り巻く経営環境(内部環境及び外部環境)の変化によって、これらの記載する内容などを変更する必要を生じることもあり、その際には、本報告書の内容が将来実施又は実現する内容と異なる可能性もあります。よって、本報告書に記載した内容や数値などを、弊社が将来に亘って保証するものではないことを、充分にご了承願います。

この知的資産経営報告書は、石川県が株式会社迅技術経営に委託した石川県民間提案型継続雇用創出事業「伝統的工芸品産業事業者の魅力伝える知的資産経営作成事業」により作成いたしました。